

Title	Sir Gawain and the Green Knight にみられる Historical Present について(続)
Author	水鳥, 喜喬
Citation	人文研究. 20 卷 7 号, p.639-653.
Issue Date	1968
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Sir Gawain and the Green Knight に みられる Historical Present について

(続)

水 鳥 喜 喬

Ferly fayre wat3 þe folde, for þe forst clenged,
In rede rudede vpon rak rises þe sunne,
& ful clere caste3 þe clowdes of þe welkyn. (1694—96)

(大地はまことに美しかった。霜がおりていたのだ。

漂う雲の上を太陽が赤く燃えながら昇ってゆく。

燦然と輝きながら大空の雲を払い散らしてゆく。)

Sir Gawain and the Green Knight (以下 *Sir Gawain* と略す) のあざやかな描写, すぐれた叙述が高い評価をうけていることは, 今さらいうにおよばない。そしてこの描写の効果を高めている有力な手段のひとつとして, 近代英文法上 “Historical Present” と呼ばれている技法がきわめて頻繁に用いられていることは, Steadman の指摘を待つべくもないところであり¹, その使用の実態を sentence の構造という見地から外見的に調査した結果が, 前号において報告したところであった。²

英語史上 Historic(al) Present (Jespersen など Dramatic Present と呼ぶ学者もあるが) は, OE 期には適当な用例はみつからず, 実質的には ME 期において, 特に14世紀中ごろ以後に急速に多用されるようになったものであり, *Sir Gawain* においても, この手法が未発達ではないが未完成の段階であることを前号において示すことができた。すなわち, Historical Present と呼ばれるものは, 描写力を高めるために, 一連の叙述を vivid に展開させようとする目的で使用されるものであるから, 例えば次に示す例にみられるように, 叙述の起点から全ての動詞がこの Tense form で表現されることが当然期待されるのである。

Ho comes nerre with þat, & cache3 hym in arme3,

Loute3 luflych adoun & þe leude kysse3;

Þay comly bykennen to Kryst ayper oper;

Ho dos hir forth at þe dore with-outen dyn more,

& he ryches hym to ryse & rapes hym sone,
Clepes to his chamberlayn, choses his wede,
Bo3e3 forth, quen he wat3 boun, blypely to masse; (1305—11)

しかし、*Sir Gawain* においては、この例にみられるように、一連の叙述における動詞の Tense に一貫性がみとめられる場合は、実際には僅少であって、Historical Present がおおむね近代英文法の立場から期待される situation に現われてはいるが（その他 rhyme の関係からと考えられる場合などがある）、ほとんど全ての場合、例えば、

Dis hapel haldez hym in, & pe halle entres,
Driuande to pe heze dece, dut he no wo3e,
Haylsed he neuer one, bot heze he ouer loked. (221—223)

にみられるように、Present Tense は長く続かず、Preterite に転移してしまうのであって、さらには

Bot quen pe dyntez hym dered of her dry3e stroke3,
Den, brayn-wod for bate, on burne3 he rase3,
Hurtez hem ful heterly per he forth hy3e3,
& mony ar3ed perat & on lyte dro3en. (1460—63)

におけるように、Present と Preterite の両 Tense の著しい交錯現象がみとめられているのである。

さて、Tense にみられるこのような交錯現象は、必ずしも *Sir Gawain* だけに限ったことではなく、ME 期の他の作品にも数多くみとめられているものである。Koziol は、このような Praesens historicum としての Present form は、余りしばしば使用されているので、Preterite とともに物語の一般時 (die gewöhnliche Zeit der Erzählung) と呼びうるとし、両時制が全く急激に交代しているので、このような Present をただ物語に生氣を与えるための手段として用いられているとみなすことは必ずしも可能ではないとしている。そして、数行全体にわたって全ての動詞が Present Tense form で用いられている場合はほとんどなく、1, 2 行のうちに全く不意に Preterite にかわっている場合の著しいことを、*Sir Gawain* のほか、*Pearl*, *Piers the Plowman*, *King Alisaunder* そのほかの作品からの例を示して指摘している³のである。さらに、Koziol はこの Tense 交錯の原因を求めるために、*The Wars of Alexander* の二種の MS を parallel に示し、対応する動詞の Tense を比較させて、写字生に由来すると考えることができる⁴と述べている (Daß mancher plötzliche Wechsel von Präsens zu

Präteritum oder umgekehrt auch erst vom Schreiber stammen kann, zeigen mehrere Stellen in WA, wo eine Hs. das Präsens, die andere das Präteritum hat.)⁴。しかしながら、この場合、Koziol は、たまたま存在している2つのMSについて単に語形の観察を行なっているにすぎないし、彼が示している対応関係も決して一貫性を示しているものではないのである。少なくとも *Sir Gawain* に関する限り、実際に Present Tense form の使用されている実態を調査してみると、前にも述べたように、今日 Historical Present が期待される場面においてきわめて著しく現われているのであり、具体的にいうならば、静的場面の描写におけるよりは動的な叙述における動詞に著しく、さらに Present form の動詞を支配している主語は無生物である場合は少なく、人間ないしは動物あるいは本稿の冒頭に掲げた例にみられるような無生物の擬人化ともいえるような主語の場合が圧倒的に多いことは、前号にもふれたところであり、しかも Present Tense form が、この物語の一部（前半とか後半とかいう）に限っておらず詩全体にわたっているところをみれば、詩人と写字生の間には言語上の大きな相違は多分ないとみられることから考えて、⁵ Steadman はじめ多くの学者が指摘しているように、英語史的観点から判断するのが適当であろう。

それ故、*Sir Gawain* に現実にみとめられるこのような Present と Preterite の両 Tense の交錯、いい方をかえれば、過去の文脈における動詞が Present Tense で用いられている場合が非常に多いという事実を、本質的に理解するひとつの糸口として、問題の動詞が表わしている Aspect (Aktionsart) を考慮にいれる必要があると考えられるということを前号においてふれたのであった。本稿では、このような観点から、*Sir Gawain* において過去の文脈の中で Present Tense form で用いられている動詞を Preterite Tense との関係から調べてみたいと思うのである。

そもそも印欧祖語においては、動詞は非常に複雑な屈折組織をもっていたと想像されている。そして、この屈折組織は文法的には時制というよりは、相 (Aspect: durative or imperfective; aorist, punctual or momentaneous; perfective; iterative, etc.) を表わすものであったが、次第に動詞の表現する行為の時間上の関係を示す手段として用いられるようになってきたのである。この屈折組織はとりわけゲルマン語において著しく簡単になり、少なくとも形態上は Present と Preterite の2つの Tense しか存在しなくなったのである。⁶ 英語の場合でも、OE の動詞は Present と Preterite の inflexion しかなく、いわゆる Two-Tense system であった。従って、Present inflexion は、例えば, pā pēow-

an *drincað medo* ('the slaves drink mead')⁷ のように現在時を表わすほか、
ic mē mid Hruntinge dōm gewyrce, oþðe mec dēað nimeð ('I shall achieve
 fame for myself with Hrunting, or death will take me')⁷ のように未来時を
 表わすのにも用いられたし、一方 Preterite inflexion の方は、*hī fēollon* ('they
 fell')⁷, *pā pā menn slēpon, pā cōm his fēonda sum* ('while men were sleep-
 ing, one of his enemies came')⁸ のように本来の過去のほか、*pās ytemestan
 worhton āne tīd, and pū dydest hīe gelice ūs, þe bæron byrþenna on pisses
 dæges hætan* ('these last have worked one hour, and you have made them
 equal to us, who have borne burdens in the heat of this day')⁸ や、*pā pā
 gecōmon þe ymbe pā endleoftan tīd cōmon* ('when those came up who
 had come at the eleventh hour')⁸ のように、今日では Perfect および Pluper-
 fect が当然期待される 場合にも用いられたのである。さらにこのような簡素な
 Tense-system にあっては現在時・過去時いずれの場合も、時間上のより正確な
 関係は、例えば、*nydpearf . . . þæt hē Godes lage gýme bet þonne hē ær
 dyde* ('necessary that he should heed God's law better than he has done
 formerly')⁹ とか、*siððan hīe hīe geliornodon, hīe hīe wendon . . . on hiora
 āgen geðīode* ('after they had studied them, they translated them into their
 own language')⁷ にみられるように、文脈(時を表わす副詞も含めて)から明ら
 かにされるのであった。

しかし時代を経るにつれて、時間上の関係をより具体的に示そうとする必要が
 生じてきた。この必要を満たすものとして、いわゆる Periphrastic Tenses と呼
 ばれる形式があらわれてきたことはいままでもない。これは、起源的には、動作・
 状態を表現する本来の叙述のための動詞が、独自の意味をもつ他の動詞と結合な
 いしは関連した構造として形成されたのではあるが、後者の動詞が次第にその本
 来の意味を消失し、単に Periphrastic Tense 形成のための形式語と化したので
 ある。OE にすでに、未来時に関しては *willan* および *sculan* がそれぞれの本来
 の意味である意志・意向 (volition) および義務・必要 (obligation, necessity) の
 意味を弱めてきたことは、ラテン語の翻訳などからみとめられるところであり—
 e. g. *ic wille wyrcean mīn setl ([L] pōnam sēdem meam 'I shall make my
 throne')*¹⁰—さらに、*Hīe ne wēndon ðætte æfre menn sceolden swæ recceleāse*¹⁰
weorðan ('They did not expect that people would ever become so careless')
 のような目的節においてよくうかがわれるところである。OED によれば、*shall*
 は1人称に対して Early ME から 'the normal auxiliary for expressing mere

futurity' として用いられたとしており、そのひとつの例として、*Sir Gawain* と同じ West Midland の方言で13世紀初頭に書かれたとされている Layamon's *Brut* から次の例を掲げている。& nu we *sulleð* for heore be one bliðe *iwarð-en* ('and now we shall for their death become joyful') (8371-72)¹¹。2人称・3人称に対する *will* についても同様のことがいえるであろう¹²。

Sir Gawain においてもその例に不足しない。以下いくつかの用例を示す。

If ze *wyl* lysten þis laye bot on littel quile,

I *schal* telle hit as tit, as I in toun herde,

with tonge; (30—32)

Bot if þou be so bold as alle burnez tellen,

Þou *wyl* grant me godly þe gomen þat I ask,

bi ryzt. (272—274)

Bot I am boun to þe bur barely to-morne,

To sech þe gome of þe grene, as God *wyl* me *wysse*. (548—549)

Þer laþed hym fast þe lorde,

& sayde, 'with my wyf, I wene,

We *schal* yow wel *acorde*,

Þat watz your enmy kene.' (2403—6)

Perfect および Pluperfect に関しても OE 期にすでにその形成がみられるのである。原則的には、主動詞が他動詞である場合には *habban* と、主動詞が自動詞である場合には *beon* あるいは *wesan* と結合していたのであるが、いずれの場合でも主動詞の過去分詞は、Predicative Adjective としての性格が強く、他動詞の場合には、*hī hæfdon þā heora stemn gesetenne and hiora mete genotudne* ('They had finished their tour of duty and used up their food')¹⁰ のように *habban* の目的語と、過去分詞形をとる動詞が自動詞の場合は、*sippan hie āfarene wæron* ('after they had gone away')⁸ のように *beon* あるいは *wesan* の主語と、それぞれ文法形態上の一致をみていたのであったが、次第に *habban* ないしは *beon, wesan* との結合となり、*nū ic hæbbe gestriened oþru twā* ('now I have gained another two')⁸ のような今日の構造をとるようになってきたのである。さらに、自動詞の場合でもすでに OE から *habban* と結合する傾向を示してきた。

Sir Gawain においても次のような例を非常に数多く集めることができるのである。

Perfect:

Where werre & wrake & wonder

Bi syþe3 *hat3 wont* per-inne,

& oft boþe blysse & blunder

Ful skete *hat3 skyfted* synne. (16—19)

'Bi gog,' quop þe grene knyzt, 'sir Gawan, me lykys

þat I schal fange at þy fust þat I *haf frayst* here;

& pou *hat3* redily *rehersed*, bi resoun ful trwe,

Clanly al þe couenaunt þat I þe kyngye asked; (390—393)

Wyth blys & bryzt fyr bette,

þe lorde *is comen* þer-tylle; (1368—69)

He *hat3 wonyd* here ful zore,

On bent much baret *bende*,

Azayn his dynte3 sore

ze may not yow defende. (2114—17)

Pluperfect:

Fro þe kyng *wat3 cummen* with knyztys in to þe halle,

þe chauntre of þe chapel cheued to an ende. (62—63)

When þay *had waschen* worþyly, þay wenten to sete,

þe best burne ay alof, as hit best semed; (72—73)

For fele sellye3 *had* þay *sen*, but such neuer are,

For-þi for fantoum & fayryze þe folk þere hit demed; (239—240)

þenne *wat3* he *went*, er he wyst, to a wale tryster,

þer þre pro at a prich þrat hym at ones,

al graye; (1712—14)

Sir Gawain においては、以上英語史的に観察したこれらの Tense form がきわめて自由に駆使されて、卓越した叙述をなしえていることはいうまでもないが、*Sir Gawain* において非常に有効に使用されているいまひとつの Tense, Present Tense について考察を進めよう。

すでに述べたように、*Sir Gawain* に用いられている Present Tense form を調べてゆくと、文法上 Aspect と一般に呼ばれている問題を考慮にいれる必要を感じないではおれないのである。Aspect という概念については、例えば、Zandvoort は “Is Aspect an English Verbal Category?” と題する論文を發

表して、文法範疇としては否定的見解を表明するなど、¹³近代英文法にこれをみとめるかどうかは問題とされているが、ModE についての従来からの標準的な文法書は一応 Aspect についての章ないしは説明を与えていることは事実である (e. g. M. Deutschbein, *System der neuenglischen Syntax* Kap VI; H. Poutsma, *A Grammar of Late Modern English*, Chap. LI; O. Jespersen, *A Modern English Grammar*, Vol. IV; Krusinga, *Handbook of Present-Day English*, II, §161ff.; Curme, *Syntax* Chap. XIX; etc.)。しかし、Aspect を文法範疇としてみとめるにしろみとめないにしろ、現実には、主語の動作の様態や性質の違いが、それぞれの語彙のもつ内在的な要素も含めて、何らかの手段によって表現されていることは疑えないのである。Aspect を簡潔に定義しているものとしては、Curme の “Aspect indicates the aspect, the type, the character of the action expressed by means of words.”¹⁴ という説明がしばしば引き合いに出されることは周知のところである。Deutschbein の Aspect に関する理論は複雑である。彼は Aspect と Aktionsart の2つの概念を立てて、次のように説明する。“Die Aspekte sind subjektive Anschauungsformen: Sie bezeichnen die Perspektive, d. h. die Art und Weise, wie der Sprecher das Geschehen ansieht, wie er es von seinem Standpunkt, seinem Gesichtswinkel aus erlebt (*his attitude of mind*). Die Aktionsarten beziehen sich auf objektive, äußere Vorgänge, die in Zeit und Raum eingeordnet sind (vergleichbar etwa Telegraphenstangen, die der im Zug Sitzende wahrnimmt). Die Aspekte beziehen sich auf subjektive, innerseelische Vorgänge im Gefühls-, Trieb- und Willensleben (vergleichbar den verschiedenen Stellungen und Standpunkten, die ein Photograph einnehmen kann, um eine ihm zusagende Aufnahme zu machen). Die Aspekte sind Sache der subj. Anschauung, sie gehören ihrem Wesen nach in die Stilistik. Für sie ist das psychologische Moment wichtiger als das zeitliche.”¹⁵ Deutschbein は Aspect を主観的な相と考え、それに対して客観的に mode of action を表現するものとして Aktionsart なる概念を立てたのであり、この mode of action という考え方は、Fridén にくらげられているといえるのである。彼は、Have—および Be—Perfect の問題を解く鍵として、全ての動詞を、durative な mode of action をもつ動詞を Durative verb, それに対して non-durative な mode of action をもつ動詞を Terminative verb と呼んで、それぞれの内在的な表現上の特徴を求めようとしたのである。¹⁶

Aspect という概念を英文法にみとめる場合、次に、どのような範疇をこれにみとめるかという問題が当然生じてくる。そして従来一般的にはまず Perfective および Imperfective (or Durative) という大きな分類がみとめられていることは周知のところである。また前者が表される典型的な文法的構造として Perfect Tense form が挙げられていることもいうまでもない。事実、Quirk & Wrenn の *Old English Grammar* では、Perfect を Aspect として解説しているのである。Aspect と Tense はよく錯綜するものであることは従来からいわれてきているところであるが、*Sir Gawain* にみられる Perfect は前にもその例を示したとおり、Tense の範疇において十分扱えるものであり、この作品においては、OE 来の Present と Preterite に加えて、(pure) future, Perfect, Pluperfect の諸 Tense が十分発達し、自由に駆使されうる状態にあったと理解してよいであろう。他方、Durative aspect については、再び Curme の説明を借りれば、“Durative Aspect. This type represents the action as continuing. We usually employ here the progressive form: ‘He is eating.’” と述べられているが、ここに当面の問題解決に対してきわめて示唆的なものを感じるのである。すなわち、Curme のいう durative aspect を表現する syntactical な構造が歴史的に未発達段階においても、動作の様態の相違を表現しようという意図があったと考えることは決して不当ではないと思うのである。また、たとえそのような主観的意図をみとめがたいとしても、Curme の説明を、Deutschbein のいう Aktionsart の観点から理解すれば、“The Progressive form represents the action as continuing”あるいは、“The action is represented as continuing by the Progressive form”ということになるが、このような syntactical な構造が未発達な状態においても、Durative mode of action が感じられるものがあつたのではないだろうか。英語史的にみて十分想像されることではあるが、*Sir Gawain* においても *be* 動詞と語尾に *-and*, *-yng* (*Sir Gawain* にはこの2つの形があるが、ほとんどの場合が前者の語尾をとっており、*-yng* 形はごく僅かである) を伴った動詞とが(前置詞を介在するにしろしないにしろ)結合している例は皆無である。ここに *Sir Gawain* という物語の中で過去の文脈において現われている Present Tense form の本質への接近の糸口のひとつがあると思えるのである。このように考えて、冒頭に掲げた引用例を読むとき、そこには Preterite Tense で描かれている大地と霜の静止的な状態を背景に、ちょうどわれわれが夜明けの山で見るように、太陽が漂う雲を払いながら、あかあかと昇ってゆく動的な情景が Present Tense によっていかにもいきいきと感じられるの

である。

Sir Gawain は物語の展開の面でも、描写・叙述の面でも、詩形の面でも、非常に技巧に富んだ物語詩であるからして、この作者がこの物語を単に全て過去の出来事として一様に過去の時制で描くのでなく、物語に生気をあたえ、あたかも現在眼前に展開しているように聴衆にきかせる有効な手段として、**Historical Present** と呼ばれる、当時発達しつつあった手法を用いることに決して消極的ではなかったということをかかひ知るのである。そして、文法的には、**Preterite** によって感じとられる静止的状态 (*the state of things*) や瞬時的動作 (*the momentaneous mode of action*) とは対象的な継続的動作 (*the durative mode of action*) を **Present Tense** から味わうことができると考えるのである。

以下、**Preterite** で描かれる静的な状態において継続的動作が **Present Tense** で描かれている場合、**Preterite** による瞬時的な描写と対照的に、**Present Tense** によって継続的動作が描かれている場合、および独立的に用いられている場合に分類し、それぞれいくつかの用例を示したい。

(1) **Preterite Tense** による **Terminate** な静止的状态に対して、**Present Tense** が動的な **Durative mode of action** を表現しているとみられる場合：

Pis wat3 [pe] kynges countenaunce where he in court were,

At vch farand fest among his fre meny

in halle;

Der-fore of face so fere

He *stiztle3* stif in stalle,

Ful *zep* in pat nw zere,

Much mirthe he *mas* with-alle.

(100—106)

Heme-wel haled hose of pat same grene,

Pat *spenet* on his sparlyr, & clene spures vnder,

Of bryzt golde, vpon silk bordes, barred ful ryche,

& scholes vnder schankes, pere pe schalk *rides*;

& alle his vesture uerayly *wat3* clene verdure,

(157—161)

Til mezel-mas mone

Wat3 cumen wyth wynter wage:

Den *penkke3* Gawan ful sone

Of his anious uyage.

(532—535)

So harmayst as he *wat3*, he *herknez* his masse,

(592)

Penne hentes he þe helme, & hastily hit *kysses*,
Þat wat3 stapled stifly, & stoffed with-inne; (605—606)
He *brayde3* hit by þe baude-ryk, about þe hals *kestes*,
Þat bisemed þe segge semlyly fayre. (621—622)
Now *ride3* þis renk þur3 þe ryalme of Logres,
Sir Gauan, on Gode3 halue, þa3 hym no gomen þo3t; (691—692)
Bi a mounte on þe morne meryly he *rydes*
Into a forest ful dep, þat ferly *wat3* wylde,
Hi3e hille3 on vche a halue, & holt-wode3 vnder
Of hore oke3 ful hoge a hundreth to-geder; (740—743)
At þe last, when hit *wat3* late þay *lachen* her leue
Vchon to wende on his way þat *wat3* wy3e str[a]nge. (1027—28)
Þus *layke3* þis lorde by lynde-wode3 eue3,
& G[awayn] þe god mon in gay bed *lyge3*,
Lurkke3 quyl þe day-lyzt *lemed* on þe wowes,
Vnder couert our ful clere, cortyned aboute; (1178—81)
Miry *wat3* þe mornyng, his mounture he *aske3*;
Alle þe hapeles þat on horse *schulde* helden hym after
Were boun busked on hor blonkke3, bifore þe halle zate3;
(1691—93)

(2) Preterite の動詞が、瞬時的な (momentaneous) mode of action を表現しているのに対して、Present Tense の動詞が、動的な継続的な (Durative) mode of action を表現しているとみられる場合：

Þis hapel helde3 hym in, & þe halle *entres*,
Driuande to þe he3e dece, *dut* he no wope,
Haylsed he neuer one, bot he3e he ouer loked. (221—223)
Þenn Arþour bifore þe hi3 dece þat auenture *byholde3*
& rekenly him *reuerenced*, for rad *was* he neuer,
& *sayde*, '....' (250—252)
Wyth þis he *lazes* so loude þat þe lorde *greued*; (316)
Lyztly lepes he hym to, & *lazt* at his honde; (328)
Gawan *got3* to þe gome, with giserne in honde,
& he baldly hym *byde3*, he *bayst* neuer þe helder. (375—376)

3et quyl al-hal-day with Arþer he *lenges*,
& he *made* a fare on þat fest, for þe freke3 sake,
With much reuel & ryche of þe Round Table; (536—538)
For aftter mete, with mournyng he *melez* to his eme,
& *spekez* of his passage, & pertly he *sayde*, (543—544)
Now grayþed is Gawan gay,
& *lazt* his launce ry3t þore,
& *get* hem alle goud day,
He *wende* for euer more. (666—669)
Þenne þe lorde of þe lede *loutez* fro his chambre
For to mete wyth menske þe mon on þe blor;
He *sayde*, ‘. . . .’ (833—835)
Þe lorde *loutes* þerto, & þe lady als,
Into a comly closet coyntly ho *entrez*;
Gawan *glydez* ful gay & *gos* þeder sone;
Þe lorde *laches* hym by þe lappe & *ledez* hym to sytte
& couþly hym *knowez* & *callez* hym his nome,
& *sayde* he wat3 þe welcomest wyþe of þe worlde; (933—938)
Þe leue lorde of þe lond *wat3* not þe last
A-rayed for þe rydyng, with renkkez ful mony;
Ete a sop hastily, when he *hade herde* masse,
With bugle to bent-felde he *buskez* bylyue; (1133—36)
Sone pay *calle* of a quest in a ker syde,
Þe hunt *re-hayted* þe houndez þat hit fyrst *mynged*,
Wylde wordez hym *warp* wyth a wrast noyce; (1421—23)
Ho *commes* to þe cortyn & at þe kny3t *totes*,
Sir wawen hir *welcumed* worþy on fyrst,
& ho hym *zeldez* azayn ful zerne of hir wordez,
Settez hir soffly by his syde, & swypely ho *lazez*,
& wyth a luflych loke ho *layde* hym þyse wordez: (1476—80)
Thenne *lachchez* ho hir leue & *leuez* hym þere,
For more myrþe of þat mon *mozt* ho not gete; (1870—71)
He *called* to his chamberlayn, þat cofly hym *swared*,

& *bede* hym bryng hym his bruny & his blonk sadel;

Ʒat oper *ferkez* hym vp & *fechez* hym his wedeƷ

& *graypez* me Sir Gawayn vpon a grett wyse. (2011—14)

(3) 独立的に用いられて継続的な (Durative) mode of action を表現している
とみられる場合 (以下に示すような例は余りない) :

& at Ʒis tyme twelmonyth take at Ʒe anoper,

Wyth what weppen [s]o Ʒou wylt, & wyth no wyƷ elleƷ
on lyue.'

Ʒat oper *on-swareƷ* agayn,

'Sir Gawan, so mot I Ʒryue,

As I am ferly fayn

Ʒis dint Ʒat Ʒou schal dryue.' (383—89)

Ʒus in Ʒeryl & Ʒayne & Ʒlytes ful harde

Bi contray *cayrez* Ʒis knyƷt tyl krystmasse euen,

al one; (733—735)

& I schal erly ryse,

On huntynge wyl I wende.'

Gauayn *granteƷ* alle Ʒyse

Hym heldande, as Ʒe hende. (1101—4)

I-wyse with as god wylle hit worƷeƷ to ƷoureƷ.'

He *hasƷpez* his fayre hals his armeƷ wyth-inne,

& *kysses* hym as comlyly as h[e] coupe awyse:

'Tas you Ʒere my cheuicaunce, I cheued no more, (1387—90)

注

1 Steadman, *The Origin of the Historical Present in English*, p. 20.

2 「*Sir Gawain and the Green Knight* にみられる Historical Present について」『人文研究』Vol. 19, No. 7, 1968.

3 Koziol, *Grundzüge der Syntax der mittelenglische Stabreimdichtungen*, p. 97.

4 *ibid.*, p. 98.

5 Tolkien & Gordon (ed.), *Sir Gawain and the Green Knight* (2nd edition), Introduction p. xiii.

- 6 Cf. C. L. Wrenn, *The English Language*, p. 16.
- 7 Quirk & Wrenn, *An Old English Grammar*, § 127 から例を借用した。
- 8 Davis (revised), *Sweet's Anglo-Saxon Primer*, § 92 から例を借用した。
- 9 Quirk & Wrenn, *op. cit.*, § 129 から例を借用した。
- 10 *ibid*, § 128 から例を借用した。
- 11 *OED*. shall 8 b.
- 12 Cf. *OED*. will 14.
- 13 Barber, Behre, and Others, *Contributions to English Syntax and Philology*, pp. 1-20.
- 14 Curme, *Syntax* § 38.
- 15 Deutschbein, *Grammatik der englischen Sprache* p. 115. § 110.
- 16 Cf. Fridén, *Studies on the Tenses of the English Verb from Chaucer to Shakespeare with Special Reference to the Late Sixteenth Century*, pp. 38 ff.
- 17 Quirk & Wrenn, *op. cit.*, § 129.

Bibliography

I. Texts:

- Gollancz, Israel (ed.), *Sir Gawain and The Green Knight* (E. E. T. S., O. S. 210, 1940)
- Tolkien, J. R. R. & E. V. Gordon (ed.), *Sir Gawain and the Green Knight* (Oxford, 1925)
- Sir Gawain and the Green Knight* (2nd Edition, edited by Norman Davis; Oxford, 1968)

II. Reference Books and Articles:

- Barber, C. L., Frank Behre, and Others, *Contributions to English Syntax and Philology* (Gothenburg Studies in English, 14; Göteborg, 1962)
- Bauer, Gero, "Historisches Präsens und Vergegenwärtigung des epischen Geschehens — ein erzähltechnischer Kunstgriff Chaucers —" (*Anglia*, Band 85, Heft 2, 1967)
- Benson, Larry D., *Art and Tradition in Sir Gawain and the Green Knight* (Rutgers U. P., 1965)
- , "Chaucer's Historical Present — Its Meaning and Uses —" (*English Studies*, Vol. XLIII, No. 2, April, 1961)
- Bϕgholm, M., *English Speech from an Historical Point of View* (George

- Allen & Unwin, 1939)
- Davis, Norman, *Sweet's Anglo-Saxon Primer* (Oxford, 1953)
- Deutschbein, M., *Grammatik der englischen Sprache* (Heidelberg, 1924)
- Frey, Johe R., "The Historical Present in Narrative Literature, Particularly in Modern German Fiction" (J. E. G. P., Vol. XLV, 1946)
- Fridén, Georg, *Studies on the Tenses of the English Verb from Chaucer to Shakespeare with Special Reference to the Late Sixteenth Century* (Uppsala, 1948)
- Graef, A., "Die präsentischen Tempora bei Chaucer" (*Anglia*, Band XII, 1889)
- Kellner, Leon, *Historical Outline of English Syntax* (Edited with Notes & Glossary by Kikuo Miyabe; Kenkyusha, 1956)
- Kottler, Barnet, and Alan M. Markman, *A Concordance to Five Middle English Poems* (Univ. of Pittsburgh P., 1966)
- Koziol, Herbert, *Grundzüge der Syntax der mitttelenglischen Stabreimdichtungen* (Wiener Beiträge zur englischen Philologie, LVIII Band; Wien und Leipzig, 1932)
- Mitchell, Bruce, *A Guide to Old English* (Blackwell, 1964)
- Mossé, Fernand, *A Handbook of Middle English* (tr. by James A. Walker; Johns Hopkins, 1952)
- , *Histoire de la forme périphrastique Être+participe présent en germanique* (Paris, 1938)
- Mustanoja, Tauno F., *A Middle English Syntax I* (Helsinki, 1960)
- Poutsma, H., *The Characters of the English Verb and the Expanded Form* (Groningen, 1921)
- Quirk, Randolph, and C. L. Wrenn, *An Old English Grammar* (Methuen, 1955)
- Roloff, Hans, *Das Praesens historicum im Mittelenglischen* (Giessen, 1921)
- Steadmann, John Marcellus, Jr., *The Origin of the Historical Present in English* (Univ. of North Carolina, 1917)
- Trnka, B., *On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden* (Prague, 1930)
- Visser, F. Th., "The 'Historical Present' in Middle English Verse

Narratives" (*English Studies*, Zandvoort Festschrift; 1964)

—, *An Historical Syntax of the English Language* Vol. II (Leiden, 1966)

Wrenn, C. L., *The English Language* (Edited with Notes by Fumio Nakajima; Kenkyusha, 1954)

(1968年10月30日)